（10 月　30 日）「ヨハネによる福音書 5：1～18」
そこで、ユダヤ人たちは病気をいやしていただいた人に言った。「今日は安息日だ。だから床を担ぐことは、律法で許されていない。」
（ヨハネによる福音書 5 章 10 節）

・ベトザタとは恵みの家という意味ですが、そこには病気で苦しんでいる人たちが大勢いました。そこに一人の人が横たわっており、イエス様はその人に話しかけました。「良くなりたいか？」。
・普通であれば、「はい、良くなりたいです」と答える場面です。しかし彼は、自分が置かれた現状や、やるせなさをイエス様に告げます。愚痴のようにも聞こえます。彼はこれまでも何度も失望し、悲しい目にあったのでしょう。
・イエス様は彼に、「起きろ」「床を担げ」「歩け」という三つの命令を与えます。その一つ一つは、今の苦しみからの脱却です。「起きる」という単語は、「復活」も意味します。彼は新しい生を、歩み出すのです。ところがそこに、異論を唱える人たちが登場してきます。

（10 月　31 日）「ヨハネによる福音書 5：19～30」
父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。　（ヨハネによる福音書 5 章 20 節）

・昨日の箇所に、ユダヤ人たちがイエス様を迫害し始めたという記事が載せられていました。理由はイエス様が安息日を破ったこと、そしてイエス様が神さまをご自分の父と言い、自分を神さまと等しい者とされたことでした。
・しかしイエス様は、さらに言葉を続けていきます。父である神さまと、子であるご自分との関係について語っていくのです。そしてユダヤ人にとって、これらのイエス様の言葉は神さまを冒涜しているものとなります。
・ヨハネ福音書には、イエス様の言葉や説教が多く載せられています。その言葉によってユダヤ人の怒りは増大し、イエス様の十字架へとつながっていくのです。イエス様＝神の独り子という図式がなければ、これらのイエス様の言葉は受け入れがたいものなのです。

福　音　書　通　読

10 月

（10 月　1 日）「ルカによる福音書 22：14～23」
それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」
（ルカによる福音書 22 章 19 節）

・聖餐式の司式の中で、「感謝聖別文」と「分餐のときの言葉」を唱えるときに、わたしはいつも緊張します。2000 年前の「主の晩餐」でイエス様がなさった出来事を思い起こすからです。
・イエス様は「わたしの記念として」、「このように」おこないなさいと弟子たちに命じました。それが現在も世界のいたるところでおこなわれていることに、感動と驚きを覚えます。
・司祭用の大きなウエハース（パン）には、十字架のイエス様が刻まれています。その大きなパンを、「わたしたちがパンを裂くとき」と言いながら二つに割ります。文字通り、イエス様の体が裂かれるのです。その「裂かれる」出来事があって初めて、わたしたちは「キリストの体にあずかります」と言えるのです。

（10 月　2 日）「ルカによる福音書 22：24～34」
しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。
（ルカによる福音書 22 章 32 節）

・「一番偉い人は誰だろう」、弟子たちはいつも、このことに関心を持っていたようです。「主の晩餐」でイエス様と共に食卓を囲んだすぐあとにも、この議論は続きます。イエス様はそれでも弟子たちを見捨てず、何度も「仕える者となれ」と語ります。
・イエス様はシモン・ペトロを、弟子の中でも特別視していたのでしょうか。イエス様はシモン・ペトロに「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやれ」と命じます。「立ち直る」ということは、彼は一度、イエス様から離れてしまうことを意味します。
・しかしその事実と共に、「あなたのために祈った」と語るイエス様の言葉が響きます。わたしたちの信仰も弱いものです。しかしその信仰が無くならず、強められるようにと祈るイエス様の姿を覚えたいと思います。

（10 月　3 日）「ルカによる福音書 22：35～46」
そこで彼らが、「主よ、剣なら、このとおりここに二振りあります」と言うと、イエスは、「それでよい」と言われた。　（ルカによる福音書 22 章 38 節）

・以前弟子たちが近くの町や村に宣教に出かけたときには、「財布も袋も履物も持っていくな」と言われていました。ところが今回は、財布も袋も持って行くように、また剣のない者は服を売って買いなさいと命じられます。この違いは何なのでしょう。
・まもなく逮捕されることが分かっていたので、その備えをさせたのでしょうか。少しでも抵抗するように、弟子たちを仕向けたのでしょうか。剣を持つことによって、イエス様たち一行は「犯罪者」として扱われることになるでしょう。
・そのあとイエス様は、「オリーブ山」に行って祈ります。マタイ・マルコでは「ゲツセマネ」と書かれた場所です。苦しみの中でイエス様は、「御心のままに」と祈られました。自分の思いではなく、神さまのご計画を優先されたのです。

（10 月 28 日）「ヨハネによる福音書 4：27～42」
さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。
（ヨハネによる福音書 4 章 29 節）

・周りの人の目を恐れ、一番暑い正午ごろに水を汲んでいた女性は、イエス様との出会いによって変えられました。彼女は水がめをその場に置いて、すぐに町に向かいました。そして人々に、イエス様のことを証言していくのです。
・「伝道」とは、自分が得た知識を他の人に伝えることでしょうか。このサマリアの女性のようにイエス様によって変えられ、その喜びを全身で表現し、人々に伝えて行く。それが大事なのではないでしょうか。
・町の人たちは、「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない」と言います。彼女は言葉だけで人々を導いたのではありません。人々に、「自分たちもイエス様に出会いたい」という気持ちを持たせたのです。これが道を伝えるということなのです。

（10 月 29 日）「ヨハネによる福音書 4：43～54」
イエスは言われた。「帰りなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。
（ヨハネによる福音書 4 章 50 節）

・昨日の箇所の中で、サマリアの人たちは「わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです」と言いました。彼らは「聞いて」信じます。つまり耳で聞く信仰です。
・それに対し、イエス様の故郷であるガリラヤの人たちは、これまでのイエス様の行動やエルサレムでなさったことを「見て」いました。「見て」からでないと信じられない信仰は、本当の信仰とは言えないのかもしれません。
・息子を癒やして欲しいと願う役人は、イエス様の「帰りなさい。あなたの息子は生きる」という言葉だけを信じて帰りました。「聞く信仰」、わたしたちにとっても、とても大切なことだと思います。

（10 月 26 日）「ヨハネによる福音書 3：31～36」
神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が“霊”を限りなくお与えになるからである。　（ヨハネによる福音書 3 章 34 節）

・この 31～36 節は、誰の言葉なのでしょうか。30 節から続いていると考えると、洗礼者ヨハネの言葉のようにも思えます。しかし内容をみると、そうでもないようです。福音書の記者であるヨハネが属していた共同体の信仰告白なのかもしれません。
・上から来られる方というのは、イエス様のことでしょう。しかし人々は、その方の証しを受け入れることができませんでした。その方には神の霊が与えられ、神の言葉を語っているにもかかわらずです。
・わたしたち人間はずっと神さまに背いて来ました。神さまがその独り子であるイエス様を遣わされても、その愛に気づくことができませんでした。しかし神さまは、それでもなおわたしたちを愛してくださいます。イエス様の十字架は、その愛のしるしです。

（10 月 27 日）「ヨハネによる福音書 4：1～26」
女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」　（ヨハネによる福音書 4 章 15 節）

・イエス様は正午ごろ、サマリアの女性に「水を飲ませてください」と言われます。当時、ユダヤ人はサマリア人を蔑み、関りを持ちませんでした。また公の場で男性が女性に声を掛けること、特に教師がそのようなことをすることはタブーとされていました。
・彼女はイエス様の声に驚きます。タブーを破ったこともそうですが、人に声を掛けられたくないと彼女は思っていたからです。ユダヤでは水汲みは涼しい時間におこなうのが普通でした。しかし彼女は、誰からも声を掛けられない時間を選んでいたのです。
・彼女は人々から、「淫らな女性」と思われていたのかもしれません。しかし彼女は不幸な結婚生活の被害者だと言えます。彼女の心はいつも渇き、命の水を求めていました。その水を、「水を飲ませてください」と言ったイエス様が持っておられることに気づいたのです。

（10 月　4 日）「ルカによる福音書 22：47～53」
イエスがまだ話しておられると、群衆が現れ、十二人の一人でユダという者が先頭に立って、イエスに接吻をしようと近づいた。
（ルカによる福音書 22 章 47 節）

・オリーブ山で祈り、弟子たちに「起きて祈っていなさい」と命じられたイエス様の元に、群衆と 12 弟子の一人であるユダが近づいて来ました。ユダは群衆の先頭に立ちます。群衆に誰がイエス様かを伝えるため、またイエス様たちを油断させるためなのでしょうか。
・昨日の箇所で剣を用意させたイエス様ですが、剣を使って抵抗した人をやめさせ、また切り落とされた耳をいやされました。イエス様が弟子たちに持たせたかった剣とは、「神の言葉（エフェソ 6：17）」のことだったのかもしれません。
・53 節の「闇が力を振るっている」という言葉は、新しい聖書では「闇が支配している」と訳されています。「神の国」とは「神さまの支配」という意味です。このとき、この世は闇に支配されていました。この闇はいつまで続くのでしょうか。

（10 月　5 日）「ルカによる福音書 22：54～62」
するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。
（ルカによる福音書 22 章 56 節）

・シモン・ペトロは漁をしているときにイエス様と出会いました。イエス様に言われるままに網を降ろしたところ、魚が網一杯になったのを見て、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです（ルカ 5：8）」とペトロは言いました。
・そして今日の場面、たき火がペトロの顔を、そして心を照らし出します。ペトロの弱さが露わにされていきます。聖書は 12 弟子の中でも一番イエス様に目を掛けられていたペトロの罪をも、隠すことなくはっきりと記します。
・このペトロの弱さは、わたしたちにとっては恵みなのかもしれません。わたしたちは神さまの前に弱い自分に気づかされることが多くあります。けれども神さまは、その弱さを何度も赦し、用いてくださるのです。

（10 月　6 日）「ルカによる福音書 22：63～71」

「お前がメシアなら、そうだと言うがよい」と言った。イエスは言われた。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう。」

（ルカによる福音書 22 章 67 節）

・長老や祭司長たちは、どうしてイエス様を恐れたのでしょうか。この時代、「自分こそはメシアだ」と言ってクーデターを起こそうとした人が何人もいたそうです。しかしイエス様は、「剣をさやにおさめなさい」と弟子たちに命じておられます。

・子ろばに乗ってエルサレムに入られたイエス様は、人々から王として迎え入れられました。しかしイエス様は、武力によってイスラエルを救うということは一切考えておられませんでした。人々はそのようなイエス様の姿に失望したのかもしれません。

・イエス様は恐れられ、同時に見捨てられました。イエス様を取り巻くすべての人たちがイエス様から離れていく中、神さまの救いの計画は確実に進行していくのです。

（10 月　7 日）「ルカによる福音書 23：1～5」

そして、イエスをこう訴え始めた。「この男はわが民族を惑わし、皇帝に税を納めるのを禁じ、また、自分が王たるメシアだと言っていることが分かりました。」

（ルカによる福音書 23 章 2 節）

・最高法院の議員たちは立ち上がり、ポンティオ・ピラトのところにイエス様を連れていきます。そして 2 節の言葉をもって、訴えるのです。

・しかし聖書のどこを見ても、イエス様が民族を惑わしたとも、税を納めるのを禁じたとも、自分のことを王、メシアだと言っているとも書かれていません。すべてはイエス様を陥れるための理由づけにすぎないのです。

・ピラトもそのことに気づいたようです。「わたしはこの男に何の罪も見いだせない」との言葉は、ピラトの正直な気持ちなのでしょう。しかし議員たちの圧力は収まるどころか、激しさを増していきます。イエス様の十字架は、避けることのできないものになっていきます。

（10 月 24 日）「ヨハネによる福音書 3：1～21」

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）

・イエス様の元にやって来たニコデモは、ファリサイ派の一人でありユダヤ人たちの指導者でした。彼は夜、イエス様を訪ねます。仲間たちに見られたくなかったというのもあるでしょう。またこの世界が闇に包まれていることを暗示しているのかもしれません。

・イエス様とニコデモとの会話は、すれ違っているようにもみえます。ニコデモはイエス様のことを、頭で理解しようとしているのかもしれません。しかしそのニコデモに対し、イエス様は「小聖書」（聖書全体を要約した一文）と言われる 3 章 16 節の言葉を伝えます。

・神さまはこの世を愛されている。だからその独り子をこの世にお遣わしになられたのだ。そう聞いても、ニコデモは理解できなかったかもしれません。しかしイエス様の十字架を通して、ニコデモは神さまの愛に気づくことになるのです。

（10 月 25 日）「ヨハネによる福音書 3：22～30」

花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立って耳を傾け、花婿の声が聞こえると大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。

（ヨハネによる福音書 3 章 29 節）

・イエス様は人々に洗礼を授けておられました。この記事はヨハネ福音書にしか書かれていないので、意外に思う方も多いかもしれません。洗礼者ヨハネの弟子たちは、人々がイエス様の方に行っていると、洗礼者ヨハネに訴えます。

・洗礼者ヨハネの弟子たちは自分たちの先生よりも、イエス様の人気が高くなっていることに対して、不安を覚えていました。しかし当のヨハネは、自分は道備えに過ぎないことを自覚していました。

・「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」という洗礼者ヨハネの言葉は、イエス様にのみ光を与えるものです。日本聖公会初代主教 C.M.ウィリアムズを称する「道を伝えて己を伝えず」という言葉が思い起こされます。

（10 月 22 日）「ヨハネによる福音書 2：1～12」
そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。（ヨハネによる福音書 2 章 6 節）

・ガリラヤのカナでの婚礼で、イエス様は水をぶどう酒に変えるという「最初のしるし」をおこなわれました。ただこの出来事だけを見ると、お酒がなくて困った新郎を助けてあげたという、ほとんどの人には関係ない話のようにも思えます。
・しかしここで、イエス様が用いた「水がめ」について、説明したいと思います。ユダヤ人は食事の前に水がめの水を使って、手や体を清めていました。水がめは「清め」の象徴であり、水がめの水によって汚れた人々は、食事の交わりから排除されていました。
・その水がぶどう酒に変わったということは、それまで排除されていた人が喜びの祝宴に招かれるということです。どんな人でも共に食卓を囲むことができるように、「清めの水」は廃棄されたのです。これこそが、イエス様のおこなったしるしなのです。

（10 月 23 日）「ヨハネによる福音書 2：13～25」
イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」
（ヨハネによる福音書 2 章 19 節）

・イエス様がエルサレム神殿で商人を追い出した記事は、他の福音書にも書かれています。しかしそれらの福音書が伝える時期（イエス様の十字架の直前）とは異なり、ヨハネでは「最初のしるし」の直後の出来事として描かれます。
・イエス様が見たのは、犠牲の動物の販売や両替と称して弱い者から搾取する商売人の姿でした。神さまと人とが交わる場所であるはずの神殿はお金によって支配され、腐敗したものとなっていました。
・そこで神さまがなされた決断は、「今ある神殿を壊し、新しく建て直す」ということでした。建物ではなくイエス様を通して築かれる新しい神さまとの関係に、人々を導くことでした。そのために、十字架と復活が必要なのです。

（10 月　8 日）「ルカによる福音書 23：6～12」
彼はイエスを見ると、非常に喜んだ。というのは、イエスのうわさを聞いて、ずっと以前から会いたいと思っていたし、イエスが何かしるしを行うのを見たいと望んでいたからである。（ルカによる福音書 23 章 8 節）

・1973 年に公開され、今もロック・オペラとして公演されている「ジーザス・クライスト・スーパースター」という作品があります。この中でヘロデは、大変ユニークな描き方がされています。
・「ヘロデの尋問」については、ルカ福音書にしか記されていません。しかしそこに描かれているのは、好奇心旺盛で、興味本位の目でイエス様を知ろうとするヘロデの姿です。その姿は、わたしたちと重なることもあるかもしれません。
・イエス様はヘロデに対し、何もしるしを見せなかったばかりか、何もお答えになりませんでした。荒れ野の誘惑のときに「神を試してはならない」と言われたイエス様の姿を思い起こします。

（10 月　9 日）「ルカによる福音書 23：13～25」
ピラトは三度目に言った。「いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」（ルカによる福音書 23 章 22 節）

・復活節前主日の礼拝の中で、福音書を朗読するときに「朗読劇」をおこなう教会があります。ナレーターやピラトや大祭司など配役を決め、それぞれのセリフなどを語っていくというものです。
・ある教会では、「群衆」のところは礼拝に出席している全員で叫ぶと決めていました。群衆が叫ぶ場面とは、今日の箇所です。彼らは何度ピラトが「釈放しよう」と提案しても、「十字架につけろ」、「十字架につけろ」と叫び続けました。
・その声の中に、わたしたちの声は含まれていないでしょうか。自分が願っていた救い主ではないと失望した群衆の声に、わたしたちの声は含まれていないでしょうか。「十字架につけろ」、その声の主は、わたしたちではないでしょうか。

（10 月 10 日）「ルカによる福音書 23：26～43」
するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。
（ルカによる福音書 23 章 43 節）

・イエス様は二人の犯罪人と共に、十字架につけられました。罪人と同様に扱われたのです。しかしその中でも、イエス様は祈られます。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と。
・この祈りは、ルカ福音書にしか記されていません。そしてもう一つ、この福音書にしか書かれていない出来事があります。それは一人の犯罪人の悔い改めです。彼は十字架につけられるほどの悪事を働きました。
・そして彼は、自分が罪を犯したこと、そして十字架の上で死ぬしかないことを理解していました。しかしイエス様に、一つだけ願ったのです。「御国でわたしを思い出してください」。イエス様はその悔い改めの心を受け入れ、救いの約束をしてくださったのです。

（10 月 11 日）「ルカによる福音書 23：44～49」
イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。
（ルカによる福音書 23 章 46 節）

・ルカ福音書は、イエス様が息を引き取る前に神殿の垂れ幕が真ん中から裂けたことを報告します。聖所と至聖所を分ける垂れ幕が裂けたことは、すべての人が救いへと導かれることを示しています。
・聖所や至聖所という名前がつく場所がある教会も多くあります。しかしその名前のゆえに、「ここから先、未信徒は入ってはダメ」とか、「ここから上は奉仕者だけ」といった縛りを設けることは、イエス様の死の際に起こった出来事と相反するのかもしれません。
・イエス様はここで、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」という十字架上の七聖語の一つを叫びます。その生涯も、そして肉体が滅んだ後も、イエス様はすべてを神さまに委ねられるのです。

（10 月 20 日）「ヨハネによる福音書 1：35～42」
彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――に出会った」と言った。
（ヨハネによる福音書 1 章 41 節）

・聖書に書かれている「召命物語」をよく覚えている人は、今日の箇所を読んで「おやっ？」と思ったかもしれません。というのも共観福音書には、シモン・ペトロとアンデレは漁師であり、漁をしているときにイエス様に声を掛けられたのだと書いてあるからです。
・聖書は様々な伝承が集められて書かれたので、どちらが正しくどちらが間違いということが重要なのではありません。この出来事を通して、聖書が何を伝えようとしているのかが大切なのです。
・今日の場面では、アンデレがイエス様のことを自分の兄弟シモンに伝え、さらにシモンをイエス様の元に連れていきました。これが最初の伝道です。わたしたちは誰かに導かれ、イエス様の元に来ました。そして違う誰かをイエス様の元に導くのです。

（10 月 21 日）「ヨハネによる福音書 1：43～51」
イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。」
（ヨハネによる福音書 1 章 50 節）

・ヨハネ福音書はアンデレとペトロの召命物語の次に、フィリポとナタナエルの物語を描きます。フィリポは他の福音書の 12 弟子リストにも登場しますが、ナタナエルはヨハネ福音書にしか登場しません。
・バルトロマイがナタナエルと同一人物だという説もありますが、イスラエル 12 部族の数を想起させる「12 弟子」にするため、便宜的にリストを作成したのでしょう。イエス様の弟子の中には女性もいたというのも、最近では定説になっています。
・アンデレ同様、フィリポも伝道者とされました。イエス様に従ったフィリポは、すぐにイエス様のことをナタナエルに伝えます。ヨハネ福音書は、伝道する弟子の姿をわたしたちに示しているのです。※このフィリポは使徒言行録 8 章に出てくる福音宣教者フィリポとは別人です。

（10 月 18 日）「ヨハネによる福音書 1：19～28」
彼らがまた、「では何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねると、ヨハネは、「違う」と言った。更に、「あなたは、あの預言者なのですか」と尋ねると、「そうではない」と答えた。　（ヨハネによる福音書 1 章 21 節）

・ヨハネ福音書に描かれる洗礼者ヨハネの姿は、他の福音書とは少し違うように思えます。エリヤの再来やイエス様の先駆者、道備えとしての役割は薄れ、証言者としての側面が強調されているように思います。
・洗礼者ヨハネは「クムラン教団」に属していたとも、「エッセネ派」に属していたとも言われています。聖書が書かれた時代に、これらのグループは人々に強い影響を与えていました。そこで洗礼者ヨハネを、イエス様よりもあえて下に書いたのかもしれません。
・ヨハネによる福音書は第 1 章で、洗礼者ヨハネについて詳しく語ります。その姿は、らくだの毛衣を着、いなごと野密を食べていたものとは異なります。しかしそのプロローグの中で、後から来られるイエスという方がどういう方なのかを、力強く証ししていくのです。

（10 月 19 日）「ヨハネによる福音書 1：29～34」
その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」　（ヨハネによる福音書 1 章 29 節）

・奈良基督教会の洗礼盤の側面には、十字架の旗を背負った小羊の姿が彫られています。洗礼のシンボルというと「鳩」を思い浮かべるかもしれませんが、「神の小羊」であるイエス様の姿も忘れずにいたいと思います。
・洗礼者ヨハネは、イエス様のことを知りませんでした。今日の箇所にも二度、「わたしはこの方を知らなかった」と書かれています。しかし「わたし(洗礼者ヨハネ)をお遣わしになった方」が言われた通り、霊がイエス様の上にとどまり、ヨハネはすべてを知ったのです。
・彼は「この方こそ神の子である」と証しします。この「証し」こそが、信仰の出発点です。わたしたちも、イエス様と出会い、イエス様を「この方こそ神の子である」と証しする者となりましょう。

（10 月 12 日）「ルカによる福音書 23：50～56a」
さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。　（ルカによる福音書 23 章 50～51 節）

・アリマタヤのヨセフは、マタイ・マルコ福音書にも登場します。ルカ福音書は彼を議員と紹介し、同僚の決議や行動には同意しなかった人として描きます。イエス様を逮捕し十字架につけることに、最後まで反対したのでしょう。
・教会を含めいろいろな団体から、声明文が出されることがあります。その文章が「わたしたちは」で始まるとき、わたしは違和感を覚えることがあります。「果たして全員がそう思っているのか」、そう考えてしまうからです。
・アリマタヤのヨセフは、議員の中でただ一人行動を起こしました。それは、彼が神の国を待ち望んでいたからです。イエス様の復活のためには、彼の行動が必要でした。彼もまた、神さまに促されてこれらのことをおこなったのでしょう。

（10 月 13 日）「ルカによる福音書 23：56b～24：12」
あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。
（ルカによる福音書 24 章 6 節）

・聖書はイエス様の復活を、「あの方は、ここにはおられない」という書き方で伝えます。婦人たちは、イエス様の姿が見えないから復活したのだと簡単に納得したのでしょうか。彼女たちが信じたのは「見た」からではなく、二人の人の言葉を「聞いた」からでした。
・輝く衣を着た二人の人は、神さまからのメッセンジャーなのでしょう。羊飼いたちに幼子イエスの誕生を知らせたときのように、今回も神さまからの使いが喜びの知らせを伝えるのです。
・しかし使徒たちは、彼女たちの言葉を信じることができませんでした。彼女たちの言葉が、「たわ言」のように聞こえたからです。イエス様の復活という出来事は、イエス様とずっと一緒にいた使徒たちでさえ、簡単に理解できることではなかったのです。

（10 月 14 日）「ルカによる福音書 24：13～35」
二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。
（ルカによる福音書 24 章 32 節）

・「エマオへの道」という絵画があります。イエス様と二人の弟子たちが一緒にエマオに向かって歩いていく、そのような場面です。とても美しい絵なのですが、聖書を読む限り弟子たちの心は不安の中にあり、決して晴れやかではなかったようです。
・それは、彼らの目が遮られていたからです。「イエス様が復活した」という婦人たちの言葉を信じることができず、これからは自分たちだけで歩いて行かないといけないと悲しんでいました。しかし実は、彼らにはイエス様という「同伴者」がいたのです。
・それに気づかされたのは、イエス様がパンを裂いた時、つまり主の食卓においてです。わたしたちも礼拝の中で、主の食卓に招かれています。わたしたちの目を開かれたとき、わたしたちのそばにいてくださる方に気づかされるのです。

（10 月 15 日）「ルカによる福音書 24：36～49」
こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。 （ルカによる福音書 24 章 36 節）

・ルカ福音書には、弟子たちの真ん中に立たれる復活のイエス様が描かれています。そこでイエス様は、「あなたがたに平和」と告げられます。原文には願望の言葉は書かれていません。ですからこのイエス様の言葉は、「平和がある」という宣言と捉えることもできます。
・聖書に書かれる平和とは、戦争がない状態のことではありません。神さまとわたしたちとの関係が、正常な状態に戻ることを言います。神さまとの間にあった深い溝は、イエス様の十字架によって埋められました。そしてそこには、「主の平和」が訪れるのです。
・イエス様はそのあと、弟子たちが差し出した焼き魚をむしゃむしゃ食べられます。不思議な光景です。お腹が空いたのでしょうか。それともご自分は、幻や夢などではないということを弟子たちに示そうとされたのでしょうか。

（10 月 16 日）「ルカによる福音書 24：50～53」
そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。
（ルカによる福音書 24 章 51 節）

・ルカ福音書の最後に描かれているのは、イエス様の昇天の場面です。エルサレムの近くにあるベタニアでイエス様は天に上げられ、その後弟子たちはエルサレムに戻りました。復活のイエス様によってガリラヤに導かれたマタイ福音書とは対照的です。
・ルカ福音書は神殿でのザカリアに対する洗礼者ヨハネの誕生予告で始まり、神殿の境内で神さまをほめたたえる弟子たちの姿で終わります。エルサレム神殿がとても大事な意味を持っているのです。
・イエス様の十字架と復活によって、新しいエルサレムが世界に向かって広がっていく。ルカは続編の使徒言行録の中で、その驚くべき神さまのみ業を伝えていきます。そしてその神さまの計画は、わたしたち一人ひとりをも巻き込んでいくのです。

（10 月 17 日）「ヨハネによる福音書 1：1～18」
初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。
（ヨハネによる福音書 1 章 1 節）

・今日からいよいよヨハネ福音書に入っていきます。しかし今日の箇所を読んで、難しさを感じたのはわたしだけではないと思います。毎年降誕節に読まれるこの箇所は、「ロゴス賛歌」と呼ばれます。
・ロゴスは、日本語で「言」と訳されます。「言」一文字で、「ことば」と読みます。わたしたちが日常使っている「言葉」とは異なります。なぜそのようにしたのかというと、「言葉」だけではあらわせない深い意味がそこにはあるからです。
・ある方はこの「ロゴス」を、「神さまの思い」と訳しました。神さまの思いが初めからあって、その思いが肉となり、わたしたちの間に宿ったというのです。そしてその神さまの思いこそが、イエス様を通してわたしたちに示された救いなのです。